2022年4月3日　説教『上昇志向』

聖書　哀歌3章18～33節、マルコ福音書10章32～45節

高橋克樹牧師

マルコ福音書10章35節以下では、2人の弟子の高慢な要求が描かれています。直前の議論で、弟子とは十字架を負う者であり、小さき者が神の国を受け継ぐ者であるということが論じられていたにもかかわらず、弟子のヤコブとヨハネは、イエスが栄光を受けるときに名誉ある最高の地位を与えてくれるように嘆願したのです。マルコ福音書では既にイエスが自らの受難の死と復活について3度予告しています。その3度目の受難復活予告に続くエピソードがヤコブとヨハネの非常にこの世的な願望の実現をイエスに願うものなのです。そこで、彼ら二人はイエスが栄光を受けられるときに、自分たちをその左右に据えて下さいと願い出たのでした。そこでイエスは十二弟子全員を呼び寄せて教えます。『あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい』（42～43節）と言って、彼らの上昇志向をたしなめるのです。

並行記事のマタイ福音書では、彼らの母の願いに代えられています。マタイ福音書はイエスの弟子たちの中でナンバー2になる2人の愚かさを、母の愚かさに意図的に転換しています。後の12弟子たちの権威を意図的に守るためでしょう。さらに、マルコ10章44節の「すべての人の僕になりなさい」が、マタイ20章27では「皆の僕になりなさい」と訳されていますが、原文に忠実に訳すと「あなたがたの間で僕になりなさい」と、キリスト教会という狭い関係性の中で仕える者になりなさいと言っているのです。しかし、マタイ福音書の改変が示しているように、当時のローマ帝国による力の支配を前提にして、イエスは社会の力関係の中で、敢えてあなたがたキリスト者は仕える者になりなさいと伝えているのです。

42節の『異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し』ていると訳されていますが、この「異邦人」は「諸民族」と訳せる語なので、少数の支配者であるローマ帝国の支配者層が諸民族を支配しているという意味なのです。『いちばん上になりたい者』とはローマ皇帝を意味している言葉であることも、マルコ福音書が言外にローマ帝国の支配構造を視野に入れて、そのような社会構造の中でキリスト者はいかに生きるべきかを問うていることがわかります。ちなみに『偉い人たち』とは、ローマ帝国の権益につながって甘い汁を吸っている支配者層の人たちのことです。ローマ皇帝の意を汲んで税金や貿易収入の中間搾取者として権力を振るっていたのが帝国内の各委任統治者たちです。イエスが生まれ育ったガリラヤでは領主であるヘロデ・アンティパスが利権をむさぼっていました。ヘロデにはやはりその権益のおこぼれにあずかる高官や将校、地域の有力者たちがいたのです。

このような社会構造の中で生きてきた人間は、時代精神の影響をどうしても受けてしまいます。ヤコブとヨハネが『栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください』（37節）と嘆願したのは、自分たちをイエスが支配する社会の中でナンバー2、ナンバー3にしてくださいという思いだったのです。イエスと自分たちの関係を、ローマ皇帝とその権益に結びついている人たちの類比で考えていたのです。これが当時の支配的な時代精神に無批判的に受け止めている人間の偽らざる願いなのです。しかし、皆さんも知っているように、イエスの十字架刑

死に際してイエスの右と左に架けられたのは強盗です。

しかも、当時の強盗はローマ帝国に政治的に反逆した人物のことなので、神の御旨は当時の支配的な時代精神とは真逆のかたちで成就したことになります。

なぜ、このような要求をヤコブとヨハネはしてしまったのでしょうか。誰もが時代精神の影響を受けるのですが、その際に単純に自分の上昇思考を満たそうとすると、時代精神に巻き込まれてしまって、その上昇思考は時代迎合型になってしまうのです。時代迎合はその時代を支配している権力者と同じ思考パターンを取り込んでしまうので、支配層の思考パターンを受け入れた者は積極的に時代精神に迎合していくことになるのです。ヤコブとヨハネはその典型です。二人の嘆願を聞いた他の弟子たちが腹を立てたのは、自分たちを差し置いて先にイエスに願ったからであり、残りの弟子たちも同じ思考パターンであったことがわかります。

しかし、これはとんでもないことだということは、３８節の『あなたがたは、自分が何を願っているのか、分かっていない』という、イエスの叱責によってわかります。そこでイエスは４３～４５節の言葉を語って弟子たちを諭すのです。『あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるためにきたのである』（４３～４５節）と諭すのです。これはすべての人が自分の意志のままになることを目指す生き方とは決定的に違います。そして、イエスは自分が「多くの人の身代金として自分の命を献げるために来た」と言います。この身代金は奴隷を解放する際に提出されるお金のことで、イエスの死は多くの人をその罪から解放させるために支払われた贖い金ということになります。だから、自分を基軸にして上昇志向で物事を解釈するのではなく、自分自身を他者のために差し出して生きていくことがイエスによって弟子たちに求められているのです。

イエスに従って「仕える」という生き方について最後に考えてみたい。他人や権力に仕えることは、多くの人にとって避けたいものです。できれば自分の思う通りに生きたいと考えます。自分の意志を他の存在に隷属させるのはいやだからです。誰もが自分の意志を貫き通して生きることが幸せであり、自己実現につながると思いがちですが、現実にそのように生きている人はいません。仮に権力をもっていて、下の人間をコントロールする生き方をしていると、物事が全く見えなくなります。自分の思いに捕らわれてしまうからです。しかし、自分を他の人の下に位置づけて、他者と一緒にやって行こうとするならば、周囲の状況や他者のことはすごくよく見えてきます。

『わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました』（Ｉコリント９章１９節）というパウロの言葉は、彼が仕える生き方を目指して生きていたから、自由な生き方ができたことを示しています。すべての人の奴隷という自覚を持ったパウロは、さしずめサーバント・リーダーであったのです。サーバント・リーダーとは、他者に仕えることを通して関係性を築き、そこに生じる信頼に基づいてリーダーシップを発揮する指導者のことです。ですから、そういう立場から教会員と教会に関わろうとするならば、教会内で侮辱されたり、ののしられても僕として仕えることができるのです。パウロが『ののしられては優しい言葉を返しています』と語っているように、私たちはサーバント・リーダーを目指すことで、いろいろなことが見えてくる生き方を手に入れるべきでしょう。「仕える」視点で物事に関わることで、本当の自由が手に入る人生が歩めるのです。